

カネト

ほのお
—炎のアイヌ魂

たましい

沢田 猛
こさか しげる



916 沢田 猛

カネト;炎のアイヌ魂

浜松 ひくまの出版 昭和58

200p 22cm(ひくまのノンフィクション)

カネト―炎のアイヌ魂

定価 二二〇〇円

昭和五十八年二月 初版発行

昭和五十八年四月五日 第二刷発行

著者・沢田 猛・こさかしげる 編集・那須田 稔 ©

発行人 那須田敏子

発行所 ひくまの出版

静岡県浜松市佐鳴台三―四八―六

営業所 静岡県浜名郡舞阪町弁天島

TEL 〇五三五九(二) 四七九八

印刷所 瞬報社写真印刷株式会社

乱丁本・落丁本はおとりかえます。

カネト

ほのお たましい
— 炎のアイヌ魂 —

沢田 猛 ・ 文
こさかしげる ・ 絵



32052

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会



はじめに

これは

自然しぜんのきびしさと

数々かずかずの迫害はくがいにたえて生きた

ひとりのアイヌ・川村かわむらカネトの物語ものがたりです

母はの吹ふく、ムツクリとよぶちい小さな樂器がっきが

大好きだいすだったカネトは

生きる勇氣ゆうきとはなにかを

私わたしたちに やさしく語かたりかけています

もくじ

はじめに

第一章

カネト 原野を走る

1、 酋長モノクテの孫

2、 カムイの森

3、 陸蒸気がやってきた

4、 原野をゆく

第二章

カネトの旅立ち

1、 カネト 軍隊に入る

2、 カネトの旅立ち

3、 魔の峡谷

4、 あ、イノシシが

86 77 68 60 59 50 40 21 8 7



第三^{だい}章^{しょう}

カネト 天竜^{てんりゅうきよう}峽^{きやう}を行^いく

99

1、か^かみ^みの^の草^{くさ}、し^しも^もの^の草^{くさ}う^うね^ねう^うね^ねと

100

2、秋^{あき}から^{から}冬^{ふゆ}へ

108

3、さ^さよ^よなら^ら金^{きん}次^じ郎^{ろう}

116

4、不^ふ安^{あん}

126

第四^{だい}章^{しょう}

炎^{ほのお}の^のアイヌ^{アイヌ}魂^{たましい}

133

1、一^{いっ}進^{しん}一^{いっ}退^{たい}

134

2、ト^トン^ンネ^ネル^ルを^をほ^ほり^りす^すむ^む

141

3、カ^カネ^ネト^ト、襲^{おそ}わ^われ^れる^る

148

4、炎^{ほのお}の^のアイヌ^{アイヌ}魂^{たましい}

159

ル^ルポ^ポル^ルタ^ター^ージ^ジュ^ュ

カ^カネ^ネト^トを^を招^{まね}いた^{いた}人^{ひと}び^びと

171

あ^あと^とが^がき^き・沢^沢田^田 猛^猛



文・沢田 猛(さわだたけし)

1948年東京に生まれる。

新聞記者。

1975年毎日新聞社入社。

静岡支局を経て現在同社東京本社
整理本部に勤務。

静岡県近代史研究会会員。

主著「くにざかいの記録」(伝統と現
代社)

絵・こさか しげる

1925年東京に生まれる。

日本美術家連盟。

春陽会 童美連会員。

第21回小学館絵画賞受賞。

作品「やせっぽちのチア」(ほるぷ出
版)

「今昔物語」(集英社)

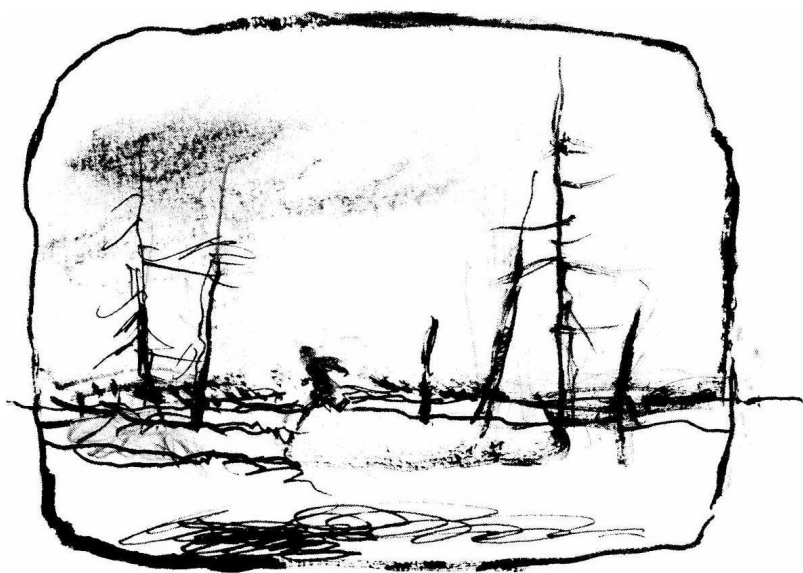
「秋子の白い朝」(あすなろ書房)

など多数。

佐久市立近代美術館、箱根彫刻の
森美術館、コンポートギャラリー
収蔵。個展13回。

第^{だい}
1
章^{しょう}

カネト
原野^{げんや}
を走^{はし}
る



1 酋長モノクテの孫

ひとりの少年が、北海道の原野を走っていた。ときどき、こぶしで、目をこすりながら走っていた。はるかむこうに、まだ頂きに雪をのいた大雪山が、うつすらとかすみのかかった空に浮かんでいる。少年は、走りつかれると、そのまま草原にたおれこむようにうつぶせになった。しばらく肩をふるわせ、泣きじやくっていた少年は、いつのまにか、寝息をたてていた。浅黒く、ほりの深い少年の顔に、くやしなみだのあとが、いくすじもこびりついていて、やわらかな芽が枯れた野原のあちこちに出始めた四月、北海道の石狩川のほとりは、春のよそおいにつつまれていた。その春のよそおいは、反対に、少年の心は暗く閉ざれている。

少年は、川村カネト。

父は、ほこり高いアイヌ酋長七代目イタキシロマで、母は、アベナンカ。カネトは明

治二十六年五月、北海道の旭川市永山町のキンクシベツで生まれた。

キンクシベツというのは、山のほうにうねった川という意味のアイヌ語で、その川というのは、石狩川のことだ。

北海道は石狩川の歴史でもある。母なる川―石狩川をアイヌの人びとはこよなく愛した。旭川市の中心部を、東から西へ流れる石狩川は、近文町のあたりで、美瑛川、忠別川、オサラッペ川など、五つの支流を集めて大河にかたちを変える。

カネト少年の家は、この川ぞいに集落をつくる上川アイヌを代表する川村家であり、少年は、生まれながらにして、名門の血を受けついでいた。

川村カネトの先祖は、むかし、オホーツク海に面した北海道の北東部の網走、湧別地方に住んでいた。ところが、その子どもが女ばかり十一人だったので、これではゆく先が思いやられると、丸木舟をあやつつて、オホーツク海を宗谷にむかい、とちゅう、川ぞいのコタン（アイヌ語で集落という意味）に、娘をひとりずつおいて、子孫の繁栄を祈ったという。

その最後の十一人めの娘が、キンクシベツ（石狩川）のほとりに住みつき、これが、

川村家のはじまりだと伝えられている。

カネトの祖父は、モノクテといった。

モノクテは、上川アイヌの名酋長、クーチンコロをよく助けて、活躍した。

徳川時代のおわりのころ、本州から北海道の探検調査に来た幕府の人びとの道案内な

どをして協力したという。北海道の大自然は、本州とはくらべものにはならないほど

豊かな資源にめぐまれていた。徳川幕府のころから、積極的に北海道の調査に乗り出し

たのもこのためであつた。

モノクテは幕府の探検隊が、吹雪の原野で立往生しているときに、危険をもとめ

ずに救援に向かったりする勇氣のある人物であつた。

このクーチンコロの悩みは、むすこたちにすぐれたものがないことだつた。考えぬ

いた末に、他のアイヌたちとも話しあつて、部族のなかで、もつとも勇敢でかしく、し

かも思いやりのあるモノクテを新しい酋長に選び出した。

酋長モノクテの家に生まれたカネトは、まもなく、キンクシベツから旭川の近文町

に移り住むことになった。

明治の時代に入り、政府は、北海道の原野を開拓することに全力をそそいだ。そのために、むかしからこの土地に住むアイヌの人たちを農業に従事させようとした。

それ以前、アイヌの人たちは、石狩川や忠別川、美瑛川に沿ってところどころに二、三戸、多くて六、七戸ぐらいのコタン（集落）をつくり、魚やけものをとって暮らしていた。

ところが、明治政府の方針で、これらのアイヌの人たちは、近文に集められることになったのである。

カネトは、こうしたところに生まれ、旭川第三尋常小学校（いまの、北海道教育大学付属小学校の前身）に入学した。

目の大きな、心のやさしい男の子だった。家の手伝いをすすんでする働くことの好きなカネトは、家族たちに小さいころからのものしく思われていたし、同じアイヌのコタンの人びとからもだいにされていた。

「いいか、シャモなどに負けるなよ。おまえは、上川アイヌの酋長の家を受けつぐのだからな。」

祖父そふのモノクテからカネトはそうはげまされて、小學校しょうがっこうに通い始めた。アイヌの人びとは本州ほんしゅうから渡わたつて来た日本にほんじん人を和人シヤモとよんだ。學校がっこうへ行くと、たちまち、カネトは、「アイヌ、アイヌ、やーい。」

と、シヤモの子たちにはやしたてられ、こづきまわされた。

朝あさ、校門こうもんのところまでくると、カネトは、待ちかまえていたシヤモの子どもたちにとりかこまれてしまう。

「おい、こいつの顔かお、見ろよ。おかしな顔かおしてらあ。」

「ほんとうだ。目めがへつこんで、げじげじまゆ毛げでさ。」

「おまえ、なんていう名なだ。」

カネトは、おびえて後あとずさりする。

「おい、なんとかいえよ。」

からだの大きな上級生じょうきゅうせいが、ぐいとカネトの肩かたを押おした。

ふいをつかれて、カネトはあおむけにひっくり返かえった。

だれかが、かん高い声こえで叫さけんだ。

「こいつ、アイヌのカネトだってよ。」

「なまいきに、酋長のむすこだってさ。」

「近文のアイヌ、土人のアイヌ」

たちまち、どつと、あざ笑う声が、カネトにむかつておし寄せてきた。

明治の時代になつてから、それまで土人とよばれていたアイヌの人たちも、同じ日本人といふことになつたが、本州から来たじぶんたちといつしよに、アイヌの子が学校に通うのがシャモの子たちは、なんともいまいましいのだ。

始業の鐘がなつた。

子どもたちが、あわてて、教室にかけこんだあと、カネトは、いちばんあとからおずおずと、窓ぎわの後の席に近づく。みんなの視線がカネトにつきささる。

カネトがうつむいて席に座ろうとしたとき、ふいに横から手がのびて来て、いすをひっぱった。それに気づかずに、腰をおろしたカネトは、どすんと、しりもちをついてしまった。

教室中が大笑いであつた。

そのなかでカネトはじつとくちびるをかみしめていた。

毎日、このようなしうちにあったカネトは、授業中、いつもうわのそらですごした。授業中に身を入れるより、まわりの視線が気になつてしかたがなかったのだ。先生が黒板にむかつて字を書いていると、うしろからこづかれたり、つねられたりする。カネトは、そんなことをされても声も立てられなかった。

そして、休み時間になると、まっ先に教室からとび出し、木造校舎の縁の下にもぐりこみ、じつと、息をこらす。

そんなカネトをのぞきこんでは、棒をふりまわし、

「出てこい、アイヌ、出てこい、こい。」

と、からかうシャモの子どもたちだった。

その日も、カネトは、校舎の縁側の下にもぐりこんで、クモの巣にからまれながら、じつとしていた。

クモの巣が風にゆれる。巣の中心部にクモがいた。うずくまっているカネトはぼんやりとクモを見ていた。

カネトは、授業が始まり、みんながいなくなった後でも、教室にもどろうとはしなかった。教室のほうから、唱歌をうたう楽しそうな声がきこえる。

カネトは、むしろように悲しくなつて、ここまで、走つて来たのである。

草むらにうつぶせになっているうちに、いつのまにか寝入ってしまった。風のなかの野の花のあまいかおりが、カネトを眠りにさそつたのである。

石狩川の流れが、ゆつくりと春を運んでくる川のほとりの草むらのなかで、カネトは眠っていた。小さいころ、祖母が歌ってくれた子守うたが、かすかに聞える。

フケ マクヌ フケ

イフン ケタバンナ

アウワ ハウン

ばあばの、そのまたばあばから

おまもりだよ おまもりだよ

せなにおわれて やや子よ ねんねこ ねんねこせ